

トーマス・ロッカー絵本の整理と展望

A Review of Thomas Locker's Picturebooks

石原 敏子
Toshi Ishihara

Thomas Locker (1937–2012), an American author and illustrator, published more than 35 picturebooks during his life time. His paintings are often said to bear reminiscences to those of the Hudson River School in the nineteenth century. This paper reviews 33 of his picturebooks and tries to point out characteristics of Locker's work in the context of the age he lived in and also in relation to the School above mentioned.

キーワード

Thomas Locker, American picturebooks, the Hudson River School

I

広大な広がりを持つアメリカ合衆国を彩る豊かな自然に対して、絵本作家たちはどのような表現を与えてきたか、100冊を超える絵本にあたりその傾向を分析したことがある¹⁾。

その際に特に目を引いたのが、トーマス・ロッカー (Thomas Locker) の作品であった。自然の力強さ、そして荘厳さを丁寧に描いた油絵からは、他に類を見ないほど心に迫るものがあった。それまでにこのような絵本に出合ったことがなかったので、彼の作品にもっと触れてみたいとなった。

トーマス・ロッカーは、1937年、ニューヨーク市に生まれた²⁾。幼いころから絵を描くことが好きで、6歳で絵画の先生にその才能を認められて教えを受け、絵画の基礎を身に着けた。大学では他の領域の研究を試みるが、芸術への関心が強く、芸術史を学び、19世紀半ばから後期にかけて活躍したアメリカで初の芸術運動として知られる、ハドソン・リヴァー・スクールの絵画に出会う。シカゴ大学、ワシントンDCのアメリカン大学を出てからは、しばらく大学で芸術を教えると同時に創作活動を行ったが、1973年、教職を離れ芸術に専念することになる。1964年のニューヨーク市のギャラリーでの初の展覧会以降、風景画を発表し続けていたが、そ

の後、家庭を持ち子どもに本を読んでやるうちに、自分も描いてみようと思ったとのことである³⁾。当時、子どもたちが美術館にあるような名画の鑑賞をする機会が少なくなっていると感じ、それならば自分の作品でその役割を果たそうと絵本作りの道に入った。その後長らく絵本界で活躍するが、再び絵本から離れ、絵画制作に専念するようになるまでに30冊以上の絵本を世に出した⁴⁾。

以下において、現段階で入手できた33冊のロッカーの絵本を時代順に概観し、整理・展望を行うことにする。

II

(1) *Where the River Begins*, by Thomas Locker. New York: Puffin Books, 1993.

Originally published by Dial Books in 1984.

テキストも絵もロッカーが担当したもので、彼の絵本第一作である。祖父とともに二人の少年が、自宅のそばを流れる川の源をたどり、再び家に戻ってくる旅が描かれる。ロッカーによると、これらの少年は、自分の息子をモデルにしており、実際の川歩きを題材にしているということである⁵⁾。この源泉を求める旅は、ロッカーのこれからの絵本創作に向けて、自身の立場を表明している点で興味深い。完結なテキスト、および、自然の雄大さを捉える絵、というロッカーの今後のスタイルが、すでにこの作品に窺える。また、「行きて帰る」という動きのおかげで、この旅に同行する読者は、安心感をもって安寧の我が家に帰ってくることができる。

(2) *The Mare on the Hill*, by Thomas Locker. New York: Penguin Books, 1985.

Originally published in hardcover by Dial Books.

少年二人のもとに、一頭の雌馬が連れてこられる。この馬は、前の持ち主に虐待され、人間不信に陥っている。少年二人は忍耐強くこの馬の面倒を見、一年後、信頼を獲得すると同時に、雌馬に仔馬が生まれるという幸せが訪れる。雌馬と少年たちとの交流、そしてその結果もたらされる雌馬の回復が、春から秋、冬、そして再び春へと、季節の移り変わりを見せる大自然を背景として描かれており、自然の持つ癒す力を強く感じさせる。

(3) *Sailing with the Wind*, by Thomas Locker. New York: Dial Books, 1986.

少女が伯父と一緒にボートで川を下り、海まで出て、再び帰ってくるまでの一日を追う。絵本は、夜が明ける前の霧の中の船出、太陽の光のなか風を受けての航海、小さな島での静かな食事、波立つ海、二人を襲う嵐の場面へと進んでいく。次の絵では、激しい雨の中を進んでいくボートが描かれているが、そこには黒雲と画面を二分するように白い雲が描かれており、こうした危険な状況においても、恐怖よりむしろ伯父への信頼を抱く少女の気持ちが窺われる。

旅が終わり、太陽が沈み真っ赤に照らされた空を背景に、暮れなずむ船着き場に戻ったボートで、帆を下ろそうと両手を上げている少女の姿は、今日一日の経験を誇っているようにも見える。刻々と変化する川下りの風景を、それらを初めて目にする少女の視点から生き生きと描き出すことに成功していると同時に、その時々少女の感情が如実に捉えられている。

(4) *The Boy Who Held Back the Sea*, retelling by Lenny Hort, paintings by Thomas Locker. New York: Dial Books, 1987.

19世紀半ばに出版されたメアリー・メイプス・ドッジ（Mary Mapes Dodge）による、オランダの湿地を舞台とした『ハンス・プリンカー、銀のスケート』（*Hans Brinker, or the Silver Skates*）に含まれる「ストーリー中のストーリー」を短く語り直したテキストに、ロッカーが絵を描いている。レンブラント（Rembrandt）やフェルメール（Vermeer）の絵を思い起こさせるオランダの風景画や室内画で構成されている。特に、風景が描かれるとき、自然描写を得意とするロッカーの特徴がよく窺える。親の言うことも聞かない怠け者の少年が、防波堤の穴からの水漏れを一晩中指で押さえながら不安と恐怖と戦い、多くの人の命を救ったという、少年の勇気と成長の物語である。

(5) *The Ugly Duckling*, by Hans Chrition Andersen as told by Marianna Mayer, illustrations by Thomas Locker. New York: Macmillan Publishing Company, 1987.

アンデルセンの「醜いアヒルの子」をマリアンナ・メイヤー（Marianna Mayer）が再話したものをテキストとし、ロッカーが絵を担当している。この「アヒルの子」は、納屋の中でも、また外の世界でも、他の鳥たちから仲間はずれにされる。納屋の描写が中心となる前半から、後半は自然のなかでの鳥たちの営みへと世界が広がっていく。この絵本の特徴を端的に表わしているのが、表紙の絵である。冷たい冬空の下、凍りつつある湖面にこうこうと輝く月が映っている。その月の反射から離れた影の部分に一羽の鳥が浮かんでいる。この絵を見るものの注意を引くのは、自然の風景であり、そこから伝わるのはその中にいる鳥の孤独である。ここに、他の絵本作家たちによる『醜いアヒルの子』との違いを見ることができる。他の作家たちが、子どもたちの理解への配慮からであろうか、「醜いアヒルの子」に焦点をあて、他の鳥たちとのかかわり合いを近い距離で描く絵を表紙に配しているのに対し⁶⁾、ロッカーは、その様子を遠景の自然描写をも含めるという大きな構図でとらえ、このストーリーを大自然の摂理のなかに置いている。ロッカーの絵本から、子どもたちは、すべての営みは自然のうちに行われているということを直感的に感じ取り、それがのちに健全な自然環境認識へと結びついていくことが期待される。

(6) *Family Farm*, by Thomas Locker. New York: Dial Books, 1988.

アメリカ中部のある農家を襲う困難を、家族が協力して乗り越える一年を描く。トウモロコシと酪農による生計が成り立たなくなり、農場を手放さなければならない事態に陥りそうになるが、別の農作物の生産へと変え、また、家族全員の献身的な働きとによって、窮地を逃れるというドラマを、一番年齢の低い少年の視点から描き出している。少年の心の痛みと、それを乗り越えた自信がよく伝わるストーリーとなっている。ロッカー自身の農場経験に裏打ちされ(折り返し)、ストーリーや絵に説得力が備わっている。

(7) *The Young Artist*, by Thomas Locker. New York: Puffin Pied Piper Books, 1989.

Originally published in hardcover by Dial Books.

風車のある風景や登場人物の名前から、オランダを舞台にした絵本であると想定される。絵の師から風景画への情熱を受け継ぎ、風景画家として身を立てようとする少年は、自分の見たまを描こうとするが、宮廷の人たちからは現実よりも見た目のよい肖像画を求められ、大きな葛藤を感じる。自然を描きたいのが彼の本心であるが、それは許されず、苦悩の中、唯一描きたいと思った対象—王の娘—を描くことによって、王から認められることになる。*The Boy Who Held Back the Sea*と同様に、その風景画、人物画に、レンブラントやフェルメールの影響を見ることができるが、そこに、画家あるいは人間としての生き方の選択の尊さを伝えるストーリーを盛り込んだところに、この絵本の意味が見いだされる。

(8) *Snow toward Evening: A Year in a River*. Nature Poems Selected by Josette

Frank. Paintings by Thomas Locker. New York: Puffin Pied Piper Books, 1990.

Original Published in hardcover by Dial Books.

ウィリアム・ワーズワース (William Wordsworth)、ラングストン・ヒューズ (Langston Hughes)、ジョン・アップダイク (John Updike) などの作品から、月ごとの自然の情景を映す詩が選ばれ、それぞれの詩情を醸し出すハドソン川峡谷の景色と結びつけられている。テキストと絵の相乗効果から、自然の営みの偉大さを読者に印象付ける絵本である。

(9) *The Land of Gray Wolf*, by Thomas Locker. Puffin Pied Piper Books, 1996.

Original Published in hardcover by Dial Books in 1991.

ネイティブ・アメリカンが自然に敬意を払いながら暮らしていたところへ、白人たちが土地を求めてやって来た。彼らは自分たちの欲するままに木を伐り、土地を耕し開発した。その結果、グレイ・ウルフは姿を消し、一方、ネイティブ・アメリカンはリザベーションに送られることとなった。この出来事を、ネイティブ・アメリカンの一家族の物語として描き出し、リザベーションに移り住んだ少年が成人し、子どもを持つところまでが語られる。その後、白人た

ちはその土地を使い果たし、もはや生産できなくなると土地を捨てて行ってしまふ。しかし、時が流れると再び木が生えだし、動物たちが戻ってくるようになった。最後のページには、雪原を背景に遠吠えをする狼が描かれており、その野生の姿が力強い印象を残す。

アメリカ合衆国の負の歴史が、子どもたちにわかるように伝えられている。この国がアメリカの自然をどう扱って来たかを、雄大な自然を背景に力強く描き出すことで、失われたものに思いを馳せ、そして今あるものを慈しむ心を養うことを目的とした絵本である。

(10) *Catskill Eagle*, by Herman Melville, paintings by Thomas Locker. New York: Philomel Books, 1991.

ハーマン・メルヴィル（Herman Melville）の『モービー・ディック』（*Moby Dick*）の中の一節を、ロッカーが絵本に仕立てた。19世紀半ばから後半にかけて、アメリカの作家や詩人、そして画家たちがキャツキル山地（Catskill Mountains）を訪れ、自然の力をたたえる作品を多く残した。ロッカーは、ハドソン・リヴァー・スクールの画家たちのスタイルを保持しながら、この土地の自然を描き出す。

この地の広大な自然の中で生息するキャツキル・イーグルの雄姿が、「悲しみにひしがれた人間は、その悲しみがあるからこそ強くなれる」というメルヴィルのメッセージに沿うよう描かれている。『パブリシャーズ・ウィークリー』（*Publishers Weekly*）の批評は、この作品を子ども用の絵本というよりも「大人向けのファイン・アートのポートフォリオ」としている。ここでは、子ども向けではないということがこの絵本の短所のように批評されているが、そうではない。「人間の魂の高潔さを高めるには、悲しみが必要」というメルヴィルのことばづかいは、抽象的で若い人たちが理解するには難しいが、この絵本では、わしという具体的イメージを与えることで、子どもたちにもその意味するところが十分伝わると考えられよう。

(11) *Thirteen Moons on Turtle's Back: A Native American Year of Moons*, by Joseph Bruchac and Jonathan London, illustrated by Thomas Locker. New York: The Putnam & Grosset Group, 1997. Originally published by Philomel Books in 1992.

亀の甲羅は13の薄片からできている。かつてネイティブ・アメリカンは、この13片を、一年を構成する13の月の表れであると考えた。絵本は、北アメリカに住む13部族からそれぞれの月に関してのおはなしを選び、全体をとおして一年の季節の移り変わりを伝える。自然の力を恐れ敬いながらそれと共に生きていこうとする、ネイティブ・アメリカンの哲学・自然観を秘めた詩的な文章を、様々な自然の力をダイナミックに捉えたロッカーの絵が力強く支えている。

- (12) *Calico and Tin Horns*, by Candace Christiansen, paintings by Thomas Locker.
New York: Dial Books, 1992.

この絵本の前書きによると、アメリカの独立戦争後、ハドソン川流域は数少ない富裕な地主に占有されていた。土地を売り渡すという農夫たちへの約束はいつも反古にされ、高い土地使用料を課せられた彼らは、終に、正当な扱いを求めて立ち上がるという事態へと発展した、ということである。この絵本では、この争いに子どもがどのように関わったかに焦点が当てられる。

ハドソン川流域の自然描写が美しい。その中で静かな暮らしを乱す不穏な動きに、少しずつ取り込まれていく少女を描いている。幼い彼女を心配させないために家族は内緒で行動するが、少女は取り残されたように感じ不満を抱く。そうした中、彼女が偶然に知ることになった土地所有者の襲来を大人たちに知らせることで、家族の土地が守られることになる。表紙には、頭から目鼻の穴をあけた被りものを付けた一見異様な姿が描かれており、読者の心をつかむ。この絵は、この闘いにおいて農夫たちが正体を隠すため、被りものをかぶり水色のキャリコの上着とズボン身をまとったという史実に基づいており、タイトルの由来である(前書き)。ドラマチックな始まり、そしてサスペンスにとんだストーリーで、最後まで読者の注意を引き付ける。歴史は、子どもをも含めて、個人の生活と密接に関るものであることが、幼い読者にもよく伝わる。

- (13) *The Ice Horse*, by Candace Christiansen, paintings by Thomas Locker. New York: Dial Books, 1993.

テキストの作者、キャンデイス・クリスチャンセン(Candace Christiansen)は、ハドソン川流域に住んでおり、その地域を散策中に古い見捨てられた建物を目にした。のちに、これはかつて冷蔵庫のない時代、凍った川の氷をニューヨーク市に届けるための工場であったことを知り(前書き)、この忘れられかけた歴史を、この工場で働く少年のドラマとともに描き出す。少年は、自分の経験不足から、氷を運ぶ馬を氷の川に落としてしまうが、周りの大人に助けられるという話である。凍てつくような冬のハドソン川の風景を背景に、そこで働く人々の生活を浮かび上がらせるロッカーの絵がストーリーを支えている。

- (14) *The First Thanksgiving*, by Jean Craighead George, illustrated by Thomas Locker.
New York: Puffin Books, 2001. First published in the U.S. by Philomel Books, 1993.

17世紀初頭におけるピルグリムとネイティブ・アメリカンの出会いと、助け合い、そして豊かな実りへの感謝の集いを、その舞台となるケープ・コッドやプリモス・ロックが形成された頃までさかのぼり、語っている。さらに、二者の通訳として働いたネイティブ・アメリカンの

スクアント（Squanto）が、先に奴隷として連れ去られイギリス人の商船主に買われたこと、また、のちに故郷に戻った時、自分の部族はヨーロッパからもたらされた病気で絶滅していたという事実も語られている。今日行われている感謝祭の習慣について、簡潔なテキストと豊かな視覚表現をとおして、その歴史的背景を正確に伝えている。

(15) *Miranda's Smile*, by Thomas Locker. New York: Dial Books, 1994.

ロッカーにしては珍しく、家庭内の情景を描く絵本である。画家である父は娘ミランダをモデルとして座らせ、彼女の肖像画を描こうとしているが、うまくいかない。しかし、彼女の笑みは自然に生まれるもので、その瞳にあることに画家が気付いたとき、絵の完成をみることになる。画家の葛藤と親子の愛情が、若い読者にも十分に伝わる。表紙は、完成したミランダの笑顔を描いたポートレート（本文中にも掲載されている）で飾られている。少女は、その眼を生き生きと輝かせ、父親への信頼に満ちた笑顔を浮かべている。頭の左後ろにたらしめた髪は、前頭の髪の毛と異なりごく薄い茶色で塗られているため、被り物を被っているかのように見える。この点、および、彼女の身に着けている青い上着から、フェルメールの『真珠の耳飾りの少女』を思い起こす読者も少なくないだろう。ロッカーのこの画家へのオマージュと考えることができよう。

(16) *Anna and the Bagpiper*, by Thomas Locker. New York: Philomel Books, 1994.

山からかすかな音が聞こえてくるのを耳にした少女は、山の頂上近くでバグパイプを吹いている年寄りに出会う。彼は少女のために素敵な曲を演奏し、夕暮れになるまで二人は静かな時間を過ごす。家に戻り母親にこのことを報告するが、母は信じない。少女の一日は夢だったのだろうか。絵本は、「彼女は本当にその音を聞いた」と締めくくられる。

ロッカーによると、この作品は、「キャッツキル山地とハドソン川渓谷の音、景色、魔法により刺激されてできた」（折り返し）ということである。アメリカの自然とバグパイプを吹く老人の取り合わせは不可思議であるが、そうしたありえないことが起こりそうなほどに、この土地は神秘の力を秘めているのかもしれない。

(17) *To Climb a Waterfall*, by Jean Craighead George, illustrated by Thomas Locker.
New York: Philomel Books, 1995.

テキストを書いたジーン・クレイグヘッド・ジョージ（Jean Craighead George）は、先述の *The First Thanksgiving* の作者でもある。彼女は、ヤングアダルト向けの小説、*Julie of the Wolves* や *My Side of the Mountain*（共にニューベリー賞受賞作品）を代表作として、自然と人間のつながりをテーマにした作品を多く書いている。この絵本のテキストを仕上げるために、幾度もキャタースキル滝（Kaaterskill Falls）を探索した（折り返し）とのことであり、その

ために、簡潔ながら説得力ある印象深い文章となっている。このテキストとロッカーの絵を通して、読者は、作品中の少女とともに、滝を登るという冒険を体験することができる。

(18) *Sky Tree: Seeing Science through Art*, by Thomas Locker with Candace Christiansen. New York: HarperCollins Publishers, 1995.

右ページには、丘に立つ一本の木を、夏から一年をとおしてさまざまな自然条件のもとで描き出した油絵が置かれている。左ページでは、テキストは枠で囲まれ、その背景には、その時の天候を示す空や雲が描かれている。また、ページの下に載せられたその絵についての質問は、読者が絵を鑑賞する際の導きとなる。これらの質問は、科学の教師であるクリスチャンセンが書いたもので、巻末には、それに対する答えと、それぞれのページの絵画上の工夫、そして、そこに描かれている自然現象の科学的説明が載せられている。こうすることで、この絵本を、「子どもも大人も楽しめるもの」、そして「頭脳と心に届くようにした」(前書き)とのことである。クリスチャンセンとの共働のおかげで、自然をより科学的にとらえるようになり、その結果、自然への驚きの感覚が深まった(前書き)とするロッカーは、この絵本を通して、読者を同様の経験に誘おうとしている。同じ場所にある同じ木が季節の中で変化していく姿が如実に描かれ、自然の悠大さを感じさせる、見ていて飽きない作品である⁷⁾。季節を通しての木の姿の描写という点では、イェラ・マリ (Iela Mari) の『木のうた』(*L'albero*, 1973) が思い起こされるが、絵のスタイルは全く異なっており、二作品を比較するとロッカーの特徴がより顕著になる。

(19) *The Earth under Sky Bear's Feet: Native American Poems of the Land*, by Joseph Bruchac, illustrated by Thomas Locker. New York: The Putnam & Grosset Group, 1998. Originally published in 1995 by Philomel Books.

前述した作品、*Thirteen Moons on Turtle's Back: A Native American Year of Moons* で共作したブルチャックのテキストにロッカーが絵を付けている。前作同様、ブルチャックは、ネイティブ・アメリカンの民話や歌に題材をとっている。一般的に「北斗七星」とされる星座をネイティブ・アメリカンたちは「空のくま」ととらえており、その熊が空から彼らの生活を見下ろしたときどのような光景が見えるのか、と考えたのがこのストーリーの始まりであった(ブルチャックによる後書き)ということである。彼はかつてイロコイ族の長老から、「自然界のすべてのものには声があり、ストーリーがある」(後書き)⁸⁾と聞いたことがあり、今日の人々の多くは忘れてしまっているが、「自然を称える歌にはそれらの声やストーリーが詰まっている」と考えている。この絵本では、夜に起こる出来事を歌った詩を集め、そうすることで、夜は、小動物から動物、そして人間たちが、自然との関わりの中で様々な活動を行なう豊かな時間であることを示している。夕暮れから夜、そして夜明け近くになるまでの様々な夜の表情が

ロッカーの筆でとらえられており、その魅力が雄弁に表わされている。

- (20) *Between Earth & Sky: Legends of Native American Sacred Places*, by Joseph Bruchac, illustrated by Thomas Locker. New York: Harcourt Brace & Company, 1996.

(11)、(19)同様のコンビの作品で、ネイティブ・アメリカンの宇宙観を映し出す。ネイティブ・アメリカンの少年は、おじから、彼らの先祖が7つの方位を持っていたことを教わる。アメリカ合衆国の東西南北の地域、および天と地にあたるロッキー山脈やグランド・キャニオンで生活を営んだ部族たちが神聖とした土地が取り上げられ、その地での自然と動物、人間の関わりが語られるが、そのストーリーのドラマ性は、これらの土地の雰囲気や丁寧な捉えたロッカーの絵なしには伝わらない。その上で、一番大切なのは自分の心という方位であり、そこそこが神聖さの生まれる場所であると伝えられるとき、臨場感あふれる絵の力と相まって、テキストは真実味を帯びることになる。

- (21) *Water Dance*, by Thomas Locker. Back matter text by Candace Christiansen. New York: Harcourt, Inc., 1997, 2002.

水は固体、液体、気体となって地球を育てている。ロッカーは、雨、川、滝、湖、河、海、霧、雲、嵐の前触れ、雷雲、嵐、虹といった現象をとらえ、それぞれに見開きを用い、左ページには詩的なテキストを、右ページには雄大な自然の水の姿を捉えた絵を配している。テキストは、水を一人称としてとらえた文章でつづられており、その簡潔さが、右ページに描かれた場面をより意味深いものとしている⁹⁾。

また、絵本巻末に、それぞれの水の現象がどのようにして起こるかについての科学的説明が、他の科学絵本を共作しているクリスチャンセンにより加えられている点も重要である。『スクール・ライブラリー・ジャーナル』(*School Library Journal*) 掲載のパトリシア・ロスロップ・グリーン (Patricia Lothrop-Green) の書評にあるように、まさに、「芸術と科学の幸せな結婚」“A happy marriage of art and science” となっている¹⁰⁾。

- (22) *Home: A Journey Through America*, illustrated by Thomas Locker. Edited by Thomas Locker and Candace Christiansen. New York: Harcourt, Inc. 1998, 2000.

「自分の住む土地が、その人の世界の捉え方や、言葉そして作品の作り方の一部となる」(前書き)¹¹⁾、という考えに基づき、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau)、ロバート・フロスト (Robert Frost)、ジョン・ミュアー (John Muir) などを代表に、アメリカ合衆国の様々な土地に生まれて住み、その土地を歌った作家、詩人、自然環境保護者等の作品が選ばれ、ロッカーの絵がその風景を提示する。絵と並べられることで、言葉による風景描写

が、より豊かな印象を持って浮かびあがる。表情豊かな西海岸の海岸線や南西部の砂漠、シカゴの都会、ネイティブ・アメリカンの地でありブルーボンネットの咲くテキサスの台地、ハドソン川流域、ニューイングランドの白樺の森など、言葉と絵に導かれて、読者はまさにアメリカを旅することになる。故郷—アメリカ—への思いがあふれる作品である¹²⁾。

(23) *Grandfather's Christmas Tree*, illustrated by Thomas Locker, written by Keith Strand. New York: Harcourt Brace & Company, 1999.

クリスマスにガチョウの木彫りを木に飾るという自分の家族に特有の習慣の由来について、作者が自分のおじいさんから直接聞いた話である。1886年、おじいさんの両親はイリノイからコロラドに移住し生活を始めた。その冬、大雪に襲われ、父は最後に残ったとうひの木を切ろうとするが、母はその木の下に二羽のガチョウ（一羽はけがをしている）を見つけ、せめてクリスマスまでは木を切らないよう頼む。この頃、夫婦に赤ん坊（作者のおじいさん）が生まれる。クリスマス後は天候も回復し、木は切らなくても済む。のち、春になり、ガチョウにも雛が生まれ家族ができる。二度目のクリスマスには（おじいさんの）妹が生まれ、家族の幸せが増す。父は、ガチョウの家族の木彫りを作り、このとうひの木に飾った。この行為が、今も作者の家族によって続けられているということである。コロラドの秋・冬・春の景色を捉えたロッカーの絵の写実性が、この感動的な実話にリアリティーとドラマ性を与えている。

(24) *In Blue Mountains: An Artist's Return to America's First Wilderness*, by Thomas Locker. New York: Bell Pond Books, 2000.

「アメリカ原初の野生」とされるハドソン川渓谷にあるキャータースキル峡谷を作者が散策し自然の美しさを感じ、その描き方を身をもって学ぶ過程を描いている。最初は、自然の偉大さに圧倒され、木々の葉っぱの一枚一枚まで自分の絵の中に捉えようとしたが成功せず、この地を歩き雄大な自然を観察するにつれ、全体として捉えることでしか鑑賞できないことに気づく、画家の学びの過程をたどることができる。作家の技法・自然との向き合い方の姿勢の変化を知ることができる点で、興味深い絵本である。後書きに「自然の美しさに触れることによって、子どもたちが世界を愛し、そこから自然保護への関心が生まれる」とあるように、子どもへの信頼と希望を伺うことができる。

(25) *Cloud Dance*, by Thomas Locker, back matter text by Candace Christiansen. New York: Houghton Mifflin Harcourt Publishing Company, 2000, 2003.

1997年出版の*Water Dance*の姉妹版である。構成は前作と同様であるが、テキストは三人称の視点からの語りが変わっている。季節により移り替わる湖畔の情景を、雲に重点を置いて描いていく定点観測的描写である。空、雲、そして、木々や湖の色が変化していく様子が、そ

それぞれ三行で書かれた詩的なテキストに支えられ、素晴らしい画集を見ているようである。湖畔には一件の家が建っており、ほとんどの絵にはその家に住んでいるのであろう母親と小さな子どもが描き入れられており、自然の中での人間の営みが伝わる。ロッカーの作品としては、自然の中に人間を配して成功している数少ない絵本の一つとすることができよう。

(26) *Mountain Dance*, by Thomas Locker. New York: Harcourt, Inc., 2001.

「大自然が踊る」というテーマの第三弾で、前二作の構成を踏襲している。テキストは三人称の視点から書かれおり、様々な偉大な山々の姿を映し出している。巻末に載せられたクリスチャンセン、および地理学者ドナルド・フィッシャー (Donald Fisher) による科学的説明に助けられ、それらの山々がどのように作られたか、また変化していくかを読者は知る。アメリカ合衆国内のよく知られた山々が例として挙げられており、地学、地理のテキストとしても読める、面白い趣向の絵本である。短い時間で変化する水とは異なり、山々が何万年かけてダンスを踊っていると捉えられているところがユニークである。最後の見開きでは、たくさんの星がきらめく群青色の空を背景にした山々の姿を描き、“Beneath the stars, / mountains dance their slow dance / that goes on and on / in the endless beauty of the universe.” というテキストが配されている。読者を悠久の彼方へと誘い、宇宙の神秘を感じさせる。

(27) *John Muir: America's Naturalist*, by Thomas Locker. Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 2003.

(28) *Rachel Carson: Preserving a Sense of Wonder*, by Joseph Bruchac, paintings by Thomas Locker. Text Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 2004.

(29) *Walking with Henry: The Life and Works of Henry David Thoreau*. Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 2002, 2011.

アメリカ合衆国における「野生」を守り、自然環境保護運動の先達となったヨセミテ峡谷の保護活動で知られるジョン・ミュアー (John Muir)。コンコルドの森に住み、自然と向き合う生活を実践し、それを作品に残したヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau)。さらには、20世紀半ば、公害問題摘発に果敢に立ち上がったレイチェル・カーソン (Rachel Carson)。それぞれ自然環境保護運動に積極的に関わった三人の生涯を描く三部作である。自然の重要性を説き、それを守るために努力した三人の活動・思想を、時に力強く、時に穏やかな自然とともに描き出すには、人の心を動かす力を持つロッカーの油絵ほど適切な表現方法はないだろう。

- (30) *Hudson: The Story of a River*, by Robert Baron, paintings by Thomas Locker. Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 2004.

ハドソン川と人間との関わりの歴史は、1万年前、最後の氷河期のおわりに、ネイティブ・アメリカンがその川沿いに住み始めたころから始まる。この絵本では、特に、ヘンリー・ハドソン (Captain Henry Hudson) がオランダの船でこの地に入って以降、400年のこの川の変化をたどる。ネイティブ・アメリカンの放逐、アメリカの独立戦争・南北戦争を経て、農場・工場の発展に伴うこの地域の開発、それに付随して起こった公害問題、ハドソン・リヴァー・スクールの画家や文筆家たちによる芸術的描写によるこの地の魅力の伝達、自然環境保護者たちによる過去の過ちの処理など、ハドソン川はアメリカという国の成り立ちの歴史を凝縮して我々に提示する。歴史家・科学者・作家・出版者でもある筆者の、簡潔で科学的・歴史的・客観的でありながら、ときに詩的で示唆的な文章を含むテキスト¹³⁾と、いつもながら雄大な自然の風景を丁寧に切り取る、ロッカーの光に満ちた風景画で語られている。

- (31) *Rembrandt and Titus: Artist and Son*, by Madeleine Comora, illustrations based on Rembrandt's work by Thomas Locker. Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 2005.

レンブラントの息子タイタスの視点から、父の画業について、その時代における意味や独自性を説明する。レンブラントは、若い頃から優れた才能によりオランダの芸術界で認められる存在となったが、次第に人々の好みが変わり、光と影のコントラストを強調する力強く荒削りな描き方の作品は受け入れられなくなり、破産にまで追いやられてしまった。しかし、それでも自分のスタイルを守り、信念を貫き、その結果、今日まで偉大な画家として認められている。絵本に用いられている16枚の絵のうち、11枚はレンブラントの実際の絵をもとにロッカーが描き直したものであり、後の5枚は、彼のエッチング等をもとに、ロッカーがレンブラントに思いを馳せて創作したオリジナルである。ロッカーは、この絵本を創作することを通して、自身の芸術家としての信条を託したと考えてもよいだろう。また、テキストが息子の視点から語られており、父への敬愛が感じられ、温かさに満ちた絵本となっている。

- (32) *Journey to the Mountaintop: On Living and Meaning*, by Robert C. Baron & Thomas Locker, illustrations by Thomas Locker. Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 2007.

生と死の境をさまようほどの大病を克服した画家と、最近友人の死を経験した著述家が、人生の意味や、宇宙における存在、他の生存物との関わりなどについての答えを求め、キャータースキル滝とキャッツキル山地を訪れる。この山歩きの経験をとおして、ネイティブ・アメリカンの考え方である7方位の意味、特に最後の内なる方向性について思いをめぐらしたことが、それぞれがつむぎだす言葉と絵で表わされていく。この絵本を開き、そこに描かれた情景を前

に、二人の思索の言葉を読むことで、現代人は、忙しい日々の中で失ってしまった自然との対話の時間を取戻し、大自然の中に取り込まれることで一時的にせよ心の平安を感じ、さらには、自身の存在の意味について再考することを迫られる。

- ③3) *Washington Irving's Rip Van Winkle*, by Thomas Locker and Ashley Foehner, illustrations by Thomas Locker. Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 2008. Illustration Copyright by Thomas Locker, 1998, 2008.

よく知られたワシントン・アービング（Washington Irving）の「リップ・ヴァン・ウィンクル物語」（Rip Van Winkle）を語り直したものに、ロッカーがキャッツキル山地の景色を描いている。彼は、この絵本の取材のためにこの土地を訪れ、すっかり虜になった（*In Blue Mountains* 前書き）とのことである。この土地の美しさのみならず、ひとを惑わすような強大な不思議な力を持つ自然に対して、そしてアービングの想像力へのオマージュを感じさせる絵本である。右ページに絵を、左ページにはテキストを配しており、テキストの背景は先述した三人の自然環境保護者の絵本と同じ系統—グレーから緑、茶色のグラデーション—の配色となっており、右ページの自然を描くページと呼応して、全体的に暖かい印象の作品となっている。

III

この章では、前章で行った作品の概観から明らかになる、ロッカー絵本の特徴と時代区分を挙げ、それらについて考察する。

時代を通して見られるロッカー作品の特徴は、以下のとおりである。

- (1) 自然を扱う絵本が圧倒的に多い。絵は、ハドソン・リヴァー・スクールの系譜に属するものである。
- (2) 人間を扱う絵本においても、自然の描写は欠かせない。（家庭内のドラマのみを扱い、屋外の自然に言及のないものは、1点のみである。）
- (3) 自然の中に人間が配されるとき、バランスが不自然で、人間が後から描き加えられたように見え、自然になじまない。
- (4) 題材、または、スタイルにおいて、オランダ画家たちの影響を窺わせる絵本がある。
- (5) 芸術家の心情を扱う絵本が数冊ある。そこには、ロッカーの画家としての信条が表わされている。（自分の描きたい題材を描く。自分のスタイルを守る。自然のままがよい。）

上記(4)に関しては、ロッカー自身、オランダ画家への傾倒を、ケンドラ・サーロウ（Kendra Thurlow）によるインタビューで述べている。特に、レンブラント、フェルメール、ロイスデ

ール (Jacob van Ruisdael) の三人を挙げており、(5)の特徴として見られるように、ロッカー自身の画家としての生き方を、レンブラントのそれに重ねていると考えても間違いではないだろう。

上記の特徴のうち、最も注目すべき点は、(1)である。ロッカーが、大学時代にハドソン・リヴァー・スクールの絵画に出会い、共感を覚え、自分もそのスタイルを採るようになったことは先述したとおりである。この派の画家たちとのつながりはよく指摘されるところであり、ロッカーは、その「第二世代」(Thurlow)とも称されている。しかし、果たしてロッカーは、この派の画家たちと同じような立場で絵を描いていたのであろうか。この点は、丁寧にみておく必要がある。

まず、ハドソン・リヴァー・スクールとはどのようなものであったかを簡単に説明する。

この芸術運動の研究者バーバラ・バブコック・ミルハウス (Barbara Babcock Millhouse) によると、それは、1825年、トーマス・コール (Thomas Cole) が、人の手の及んでいない自然を描くべくハドソン川を蒸気船でのぼって行ったところから始まった¹⁴⁾。アメリカ合衆国が独立して半世紀以上がたち、この国における独自の芸術が模索される中で、画家たちは、アメリカの野生という広大なる土地の原初の美しさに接し、それをこの国に与えられた神の恩寵の顕れと考え、それに表現を与えることになった。さらに、1870年代の鉄道の普及により、画家たちはさらに西部へ、また他の地域、ひいては、ヨーロッパや、南アメリカ大陸へと、自然の風景を求めて移動した。約50年続いたこのグループの活動は、自然に人の手が加わり、すなわち文明化していく過程と並行するものでもあり、自然と文化の対峙を描き出す絵画も生むことになった。

『ニュー・ヨーク・タイムズ・ブック・レビュー』(New York Times Book Reviews) の寄稿者ジョン・シーリー (John Seelye) の批評は、ロッカーとハドソン・リヴァー・スクールの画家たちとの関係、そして、ロッカーと自然との関係について、重要な側面を開く鍵を与えてくれる。そこでは、ロッカー作品は、“a kind of time travel that thrusts us backwards. Sophisticated in technique, it is primitivistic in spirit ... a kind of portable window into a landscape long since disappeared.” (Seelye, 49) と記述されており、この作家の作品は「失われた自然への窓」と捉えられている。この「窓」のイメージは示唆的である。すなわち、人は、窓から自然を見るとき、自分と外の風景がつながっているように感じるが、その一方で、窓は見る人を対象物から隔てる装置として機能し、対象との距離感、また疎外感を意識させるものでもあるということである。このことから、自然を失われたものとして意識せざるを得ないロッカー、および、現代人は、自然に対して、19世紀の画家たちが持ったのと同様の関係性をもはや持つことができないという重要な違いが浮かび上がってくる。

この点について、ロッカー自身はどう考えていたのだろうか。彼も、自分の自然の捉え方をハドソン・リヴァー・スクールのそれと同じだとは考えていなかったようである。それは、*In*

Blue Mountains の解説文で、裏付けることができる。そこで、ロッカーは、まずハドソン・リヴァー・スクールの特徴を以下のように簡潔にまとめている。すなわち、ハドソン・リヴァー・スクールの画家たちは、「手つかずの神の創造」を経験するために野生の中に入り、その姿を絵画に収めた。彼らは、均衡・調和のとれた「美なるもの」と、自然の超然たる力を感じさせる「崇高なるもの」を愛した。そして、「崇高」を「静けさの中で思い起こす恐怖、畏敬の念」と考えたのである¹⁵⁾。

そのあとで、彼らに対する自身の立場を表している。文章は次のように続く。

When I returned to America's first wilderness, I didn't experience it in terms of terror. For me, it was a safe haven from the horrors of modern life. At first, I wandered through the Clove as through the ruins of an abandoned church where an almost forgotten religion had once been practiced. I could no longer see nature the way the nineteenth-century painters had seen it, but with my more scientifically-oriented twentieth-century eyes, I began to see it in a new way, — as complex, interrelated process. (*In Blue Mountains*)

ロッカーは、「アメリカの原初の野生」へと足を踏み入れたとき、恐怖というものは感じなかった。むしろ、「現代生活の脅威からの逃げ場所」と感じたと述べており、19世紀の画家たちとの違いを認めている¹⁶⁾。また別のところでも、ハドソン・リヴァー・スクールが、アメリカ合衆国の風景を「神の書物」と考え、そこに神からのメッセージを読み取ろうとするキリスト教的な立場を取るのに対し、自分は「汎神論者」であると明言し（Thurlow）、彼らとの違いを強調している。

上の引用では、さらに続けて、科学的な20世紀の眼で見ると、自然はより複雑で、いろいろな要素が絡んでいるものとして見えることになる、と記している。こうした結果の一つとして、過去の画家たちの足跡をたどるのではなく、ロッカー独自の視点による、科学的知識をベースとした「ダンス・シリーズ」や、『空の木』といった科学絵本が誕生したと推測される。

さらに、ロッカーとハドソン・リヴァー・スクールの画家たちとの違いを指摘している批評家がいる。かつて、ワシントンDCにあるスミソニアン・インスティテュートで、ファイン・アートのアメリカ部門担当であったジョシュア・C・テイラー（Joshua C. Taylor）は、ロッカーの絵に見られる特性——感性と知性のせめぎ合い——から独自の詩情が醸し出されることを指摘した上で、次のように述べている。

Although at times their limpid space recalls the ideal environments of Claude or Poussin, Thomas Locker's landscapes are not glimpses of a new Arcadia. The quotation from the past re-enforces their cerebral play; they call attention less to nature than to the complex

intermingling of perception and thought in the mind of man.

Suddenly seeing becomes thinking, and thinking a delight to the eye. (Taylor, 1)

すなわち、過去からの引用をすることで、ロッカーの絵がより知的なものであることが強調されているということである。彼の絵を観る物は、自然よりも、むしろ心の中での認識と思考のせめぎ合いへと注意を引かれることになる。その理由は、前述したとおり、19世紀の画家たちが「崇高」の感を抱き、それを表現しようとしたのに対し、20～21世紀を生きたロッカー、および、彼の絵を鑑賞する我々はもはやそのように感じるができず、そこに知性の働きが加わるということになるのであろう。ただ、それはロッカーが絵を描く際には決して否定的なことではないという点を強調しておきたい。むしろ、彼は自身の絵本において、知性と感性の融合をめざし、それに成功しているのである。

このように、現代人と自然との関係が変化してしまったことを考えるとき、ロッカーのもう一つの特徴（上記(3)）—自然の中に人間が配されるときの不自然さ—は不可避のものとして説明することができるかもしれない。

ハドソン・リヴァー・スクールの画家たちの中にも、自然の中に人間を描き出す作品を残している者はいる。このグループの絵画とヨーロッパの絵画とを比較して、バーバラ・ノヴァック (Barbara Novak) は、その著書 *Nature and Culture: American Landscape and Painting 1925-1875* (1980) において、その違いを次のように指摘している。

Rarely a major protagonist in American landscape, the figure is more often engulfed in space, and sometimes absent. In Europe the figure in the landscape bulks larger than in America (Novak, 184)¹⁷⁾

ここで、ハドソン・リヴァー・スクールの絵では、人物は目を引かないように描かれているという点が重要である。実際に、たとえば、トーマス・コール (Tomas Cole) の『キャーターズキルの滝』 (*Falls of the Caaterskill*, 1826) では、画面の中央に、ネイティブ・アメリカンと思われる人物が配されているが、その姿は極小さい。また、フレデリック・エドウィン・チャーチ (Frederic Edwin Church) のアメリカ合衆国西部や南アメリカの旅から生まれた壮大な風景画 (例えば、*The Heart of the Andes*, 1859 や *Cotopaxi, Ecuador*, 1862 など) においても同様で、人物は画面の前景にとっても小さくしか描かれておらず、観る物の目を引くのは、雄大な自然の姿である。

また、ハドソン・リヴァー・スクールが自然の中に人間を描きこむとき、寓意的な意味合いが込められることも多かった。ヨーロッパの絵画に対して、アメリカ独自の絵画が求められる時代において、単に自然美を映し出すだけではならず、深い意味のある、寓意性のある絵が求

められていたからである（Millhouse, 55）。たとえば、トーマス・コールの、鹿追いのいる野生の森から、牧歌的風景を経て、帝国の発展、そして、衰退という経過を描く『帝国の推移』（*The Course of Empire*, 1834-1836）や、自然を背景に人間の誕生から成長、老齢への経過を描く『人生の航路』（*The Voyage of Life*, 1842）などを挙げるができる。そうした作品からは、ミルハウスも指摘するように、コールが、「単なる葉っぱを描く画家」にはなりたくないと主張し、「道徳的寓意」を描こうとしていたことが理解できる。（Millhouse, 66）¹⁸⁾

寓意性を持つとは、描かれた対象が一義的な意味を超え、別の次元での意味を帯びることである。描写が写実的である場合、意味はその次元にとどまる。まさにロッカーの場合がそうで、彼は写実的な描写に徹しており、描かれた人間が寓意性を帯びることはない。科学の発展により科学的知識に裏付けされた彼の認識では、人間も自然も写実的にとらえるしかない。彼の作品においては、自然の中で人間が浮き立ってしまうことが多いが、自然の中に不自然に佇む人間の描写を見るとき、そこからは、自然と対峙する姿勢を身に付け、もはや自然の中に溶け込むことのできない人間のありようが伝わって来るようである。さらには大自然の中に人間が配されること自体が不自然である、という悲しむべきメッセージも聞こえてきそうである。ノヴァックによると、ハドソン・リヴァー・スクールの画家たちは、その絵の中に文明の象徴である斧や汽車、そして人間を描くことで、来るべき未来を予感させることはあっても、「その未来の姿は楽観主義によってほやかされ無意識のうちにおさえ込まれてしまった」（Novak, 200）¹⁹⁾ということであるが、とうにその時を迎え、さらに人間の力が自然を脅かす時代を生きるロッカーは、失われたものを求めて振り返るしか他にすべはない。そうした状況の中で、残された自然にできる限り共感しようとしていると考えられよう。

次に、ロッカーの絵本制作の歴史における、三つの時代区分を検討する。

- (i) 1980年代：自然を背景とし、人物を中心にすえたストーリーを語る絵本が多い。
- (ii) 1990年代：ハドソン川流域の自然を題材とすることが多くなり、その地を重要な背景として展開するストーリーが増えている。また、ネイティブ・アメリカンの自然観を伝える絵本や、個別の自然現象（木、水など）の科学的観察絵本が生まれている。
- (iii) 1990年代後期から2000年代：自然への関心がさらに深まり、自然そのものを主題とした絵本が増える。90年代に始まった「ダンス・シリーズ」が続く。さらには、哲学や生き方についての思索的作品が創作されるようになる。また、自然環境保護者を題材とする絵本の出版も見られる。

以上のような区分は、おおまかで便宜的なものにしかすぎないが、時の経過に伴って、作品作りの傾向が変化していることは明らかである。その変化を生み出した要因は、ロッカーとハドソン川との関わり、および、彼の人生における出来事に求めることができる。ロッカーの感

受性に大きな影響を与え、彼の認識を形成した経験が明らかにされている、*In Blue Mountains* の冒頭の文章を参照する。

先に、大学時代におけるハドソン・リヴァー・スクールの絵画との出会いが、ロッカーの画家としての出発点であったと説明してきたが、ハドソン川峡谷という土地への愛着は、実はもっと前に生まれていたことが、この前書きからわかる。すなわち、子どものころにハドソン川流域を訪れ、自然の美しさに感動した経験が先にあり、それが後になって先陣の画家たちの絵によって思い起こされたということである。ロッカーの、ハドソン川流域との関係は、幼少の頃から始まっていたということがわかる。

第二の時代を作った要因は、1987年に行ったリップ・ヴァン・ウィンクルの絵本を作るための取材旅行である。ロッカーは、この地を再訪し、その美しさに再び心を捉えられたとのことであるが、その結果、この地に移り住むという決断をしており、その心頭ぶりは並大抵ではない。ここで多くの風景のスケッチが生まれ、絵本が創作されていった。

ロッカーとハドソン川との関係は、もう一度大きな転機を迎える。それは、1997年、重い病を得、医者からは死を宣告されながら17日間の昏睡状態から回復したことである。死を意識してこの地と係るようになると、今までとは異なるやり方で自然を愛でようになり、自分の自然の捉え方を明らかにする必要があるようになったということである²⁰⁾。

このように、ハドソン川との関わりが、絵本創作における変化を生み出したことがわかる。その時々のお出来事、事件に関わりながら、ハドソン川は常にロッカーにとっての創造の源であったことが理解できる。まさに、この土地が彼の人生を作っていたということができよう。

以上において、ロッカー作品の特徴を、彼の生きた時代の要求と彼の人生における出来事から、明らかにした。すなわち、時代の異なりがハドソン・リヴァー・スクールとの違いを生み出したということ、そして、後者に関しては、ハドソン川との関わり方が変わること、作品内容が変化していったということがわかった。それらを明らかにした上で、ロッカーと絵本について、もう一度考えておく必要がある。

ロッカーは、自然を題材にするとき、最上の絵を描く。彼の絵本の中では、自然を主人公とする絵本が、読んで・観ていて、一番心地よい。ロッカー自身、「自分の絵本では、自然は背景ではなく、主役である」と語っている²¹⁾。彼が絵本創作に関わるようになったのは、子どもたちにファイン・アートを経験させるためであったことは先述した通りであるが、その目的を果たすためには画集を出せばよかったではないか、という声も聞こえてくるかもしれない。しかし、そうではないことを強調しておくべきである。なぜなら、ここにこそ自然風景を題材とするロッカーの絵本作家としての矜持が見いだせるからである。

画集と絵本では、絵の提示の仕方に本質的な違いがある。画集では、一枚一枚の絵が独立している。それに対し、絵本では、読者がページをめくることによって、時間の流れを経て、絵とテキストがストーリーを作り出していく²²⁾。絵本は、おもて表紙と裏表紙の間に、読者がべ

ージをめくる早さや方向を自由に決定することのできる、時間の流れの無限の可能性を内包する一つの宇宙を作り出す稀有な媒体である。そこでは、静と動とが共存している。まさにその点において、絵本は、四季を経て巡り戻って来る、そして、動かずそこに在りながらも変化し続ける自然の姿を映し出すのに最適のメディアであると言えよう。単なる風景画集ではなく、絵本だからこそ、自然本来の姿を映しとることができたのである。

こうして、ロッカーは絵本という形態を通して、自然を主人公にした物語を、子どもたちに、そして大人にも提示してきたのである²³⁾。換言すれば、残された自然を大切に守って行くべき現代において、今最も大切なメッセージを、年齢を問わず多くの人々に届けるメディアとして、ロッカーが、絵本という媒体を選択したのは賢明であったということである。彼の絵本作家としての目的は、十分に果たされたと結論することができよう。

注

- 1) 石原敏子「絵本の棚から見るアメリカ—光と大地の物語 50 撰」。入子文子監修、谷口義朗・中村善雄編『水と光—アメリカの文学の原点を探る』（開文社出版株式会社、2013）309-342。
- 2) ロッカーの生涯については、*Something About the Author*, Volumes 59, 109 や、Leona Beasley、Kendra Thurlow などを参照した。
- 3) Thurlow によるインタビュー（2008）で、当時ファイン・アート界では値崩れが起こっており、家庭を抱えていたロッカーは、経済的な理由から絵本創作に道を求めた、とも語っている。
- 4) 上記インタビューで、ロッカーは、36 冊出版したと述べているが、その後の数はこの論文執筆の時点では、確定できなかった。
- 5) Locker, *The Man Who Paints Nature*. (10)
- 6) 例えば、ジェリー・ピンクニー（Jerry Pinkney）の *The Ugly Duckling*（1999）や、バーナデット・ワッツ（Bernadette Watts）の同名の絵本（2000）を挙げることができる。
- 7) ただ、テキストの中には絵の内容と合わないものや、文章がよく練られていないなど、テキストが絵の水準には達していない、という指摘もある。（Peters, 128）
- 8) 本文中に続く次の引用も含め、原文は以下の通りである。

“… everything in nature has its own voice and its own story. Often, those voices and stories can be found in songs still sung in honor of natural world … .”
- 9) 例えば最終見開きのテキストは以下のようである。

“I am one thing. / I am many things. / I am water. / This is my dance through our world.”
- 10) ただし、引用は、以下のように続いている。“This book is a happy marriage of art and science, although there is never a doubt as to the dominant partner.”（Lothrop-Green, 128）. ここでは、「（この絵本においては、）芸術と科学のどちらが優位にあるかという点については疑いの余地はない」とされており、ロッカーの考えでは、芸術により重点が置かれていることは、疑いの余地がないところである。
- 11) 原文は以下のとおりである。

“(For Artists and writers,) home can become part of how we see the world and how we shape our

words or our art work.”

12) Ronald Jobe は、この絵本は大人には魅力的であるが、単調な色使いや、アクションが少ない点などにおいて、子どもの想像力をかきたてたり、注意を引き付けておくことは難しい、と批評していることを指摘しておく。

13) たとえば、“We are part of nature and nature is part of us.”が適所に繰り返されている。また、“The mountain and the river saw it all.”の繰り返しが、最後では“The mountain and the river are watching.”と注意深く変更されて用いられている。

14) 以下、本文この段落のハドソン・リヴァー・スクールの説明については、ミルハウスを参照した。(Millhouse, XI-XII)

15) 原文は以下のとおりである。

America's first landscape painters went to the wilderness to be closer to God. For them, the wilderness was God's "untouched creation," and they studied design in nature to understand the divine designer. They loved beauty and what they called "the sublime."

When they saw balance and harmony in nature that reminded them of classical European paintings, they called it "beautiful." And when they experienced nature's overpowering force—in intense contrasts, unexpected lines, and dizzying heights—they described it as "sublime." They defined the sublime as "terror recollected in tranquility."

ハドソン・リヴァー・スクールの中には、様々な考えを持つ画家がおり、また、個人においても時を経て思いが変わることもあるため、すべての画家が、ここでロッカーが述べているような定義にあてはまるものではない、という点を確認した上で論を進める。さらに、ハドソン・リヴァー・スクールの画家たちの自然に対する姿勢は、より複雑なものであり、彼らの「自然への強い畏敬の念は、自然が失われてしまうかもしれないという意識に根付くものであった」(Novak 5) とするノヴァックの指摘にも十分な注意を払っておきたい。

16) ただし、この解説文の終わりでは、“Now I wonder if the joy I experience in the Clove is really different from the experience of America's first landscape painters!”としており、この峡谷で絵を描く喜びについては、先人の画家たちと違いはない、と述べている点を押さえておく必要がある。

17) この引用に続けて、ノヴァックは、その差は小さく、また国によっても異なるため、この点を強調しようとはしないとしながらも、その小さな違いにも、アメリカとヨーロッパにおける、人間と自然に対する文化的姿勢の特徴が現れていると述べている。ハドソン・リヴァー・スクールとの対比で、ロッカーの絵の特徴を考える際、こうしたノヴァックの指摘から示唆される場所は大きい。

18) 原文を以下に引用する。アメリカの風景美を描いた方がいいとパトロンや友人に諭されたのに対し、コールの態度は以下のものであった。“Cole had replied angrily to these pleas, insisting that he did not want to be a “mere leaf painter,” and stubbornly threw more energy than ever into painting moral allegories for which he had no patrons.”

19) 原文は、以下のとおりである。“The outlines of that future were blurred by optimism and submerged in the unconscious assumptions of a chosen people.”

20) その結果生まれたのが、絵本 *In Blue Mountains* である。

21) 原文は、以下のとおりである。“Because I like painting nature, in *my* books, nature is the subject, not the background.” (*The Man Who Paints Nature*, 11)

22) ロッカーが *Something About the Author*, Vol. 59 に語った次の言葉は、まさにこの点を裏付けている。“I rejoice in the expressive potential of joining words with images and painting in narrative

order.” (113.)

23) ロッカーは次のように語っている。“I see my books as a kind of bridge between generations and a way to bring fine art to the young mind.” (同上)

引用文献

- Locker, Thomas. *Anna and the Bagpiper*. New York: Philomel Books, 1994.
- , illustrated. *Between Earth & Sky: Legends of Native American Sacred Places*. Text by Joseph Bruchac. New York: Harcourt Brace & Company, 1996.
- , paintings. *The Boy Who Held Back the Sea*. Retelling by Lenny Hort. New York: Dial Books, 1987.
- , paintings. *Calico and Tin Horns*. Text by Candace Christiansen. New York: Dial Books, 1992.
- , paintings. *Catskill Eagle*. Text by Herman Melville. New York: Philomel Books, 1991.
- . *Cloud Dance*. Back matter text by Candace Christiansen. New York: Harcourt Inc., 2000, 2003.
- , illustrated. *The Earth under Sky Bear's Feet: Native American Poems of the Land*. Text by Joseph Bruchac. New York: The Putnam & Grosset Group, 1998. Originally published in 1995 by Philomel Books.
- . *Family Farm*. New York: Dial Books, 1988.
- , illustrated. *The First Thanksgiving*. Text by Craighead George. New York: Puffin Books, 2001. First published in the U.S. by Philomel Books, 1993.
- , illustrated. *Grandfather's Christmas Tree*. Text by Keith Strand. New York: Harcourt Brace & Company, 1999.
- , illustrated. *Home: A Journey through America*. Edited by Thomas Locker and Candace Christiansen. New York: Harcourt, Inc. 1998, 2000.
- , paintings. *Hudson: The Story of a River*. Text by Robert Baron. Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 2004.
- , paintings. *The Ice Horse*. Text by Candace Christiansen. New York: Dial Books, 1993.
- . *In Blue Mountains: An Artist's Return to America's First Wilderness*. New York: Bell Pond Books, 2000.
- . *John Muir: America's Naturalist*. Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 2003.
- , illustrated. *Journey to the Mountaintop: On Living and Meaning*. Text by Robert C. Baron & Thomas Locker. Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 2007.
- . *The Land of Gray Wolf*. Puffin Pied Piper Books, 1996. Originally published in hardcover by Dial Books in 1991.
- . *The Man Who Paints Nature*. Photographs by Tim Holmstrom. New York: Richard C. Owen Publishers, Inc., 1999.
- . *The Mare on the Hill*. New York: Puffin Books, 1985. Originally published in hardcover by Dial Books.
- . *Miranda's Smile*. New York: Dial Books, 1994.
- . *Mountain Dance*. New York: Harcourt, Inc., 2001.
- , paintings. *Rachel Carson: Preserving a Sense of Wonder*. Text by Joseph Bruchac. Golden,

- Colorado: Fulcrum Publishing, 2004.
- , illustrated. *Rembrandt and Titus: Artist and Son*. Illustrations based on Rembrandt's work by Thomas Locker. Text by Madeleine Comora. Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 2005.
- . *Sailing with the Wind*. New York: Dial Books, 1986.
- , paintings. *Sky Tree: Seeing Science through Art*. Text by Thomas Locker with Candace Christiansen. New York: HarperCollins Publishers, 1995.
- , paintings. *Snow toward Evening: A Year in a River Valley*. Nature Poems Selected by Josette Frank. New York: Puffin Pied Piper Books, 1990. Originally published in hardcover by Dial Books.
- , illustrated. *Thirteen Moons on Turtle's Back: A Native American Year of Moons*. Text by Joseph Bruchac and Jonathan London. New York: The Putnam & Grosset Group, 1997. Originally published by Philomel Books in 1992.
- . *Thomas Locker: The New American Realism*. With an introduction by Joshua C. Taylor. Chicago: R.S. Johnson International Gallery, 1972.
- , illustrated. *To Climb a Waterfall*. Text by Jean Craighead George. New York: Philomel Books, 1995.
- , illustrated. *The Ugly Duckling*, by Hans Christian Anderson. As told by Marianna Mayer. New York: Macmillan Publishing Company, 1987.
- . *Walking with Henry: The Life and Works of Henry David Thoreau*. Golden, Colorado: Fulcrum Publishing, 2002, 2011.
- , illustrated. *Washington Irving's Rip Van Winkle*. Text by Thomas Locker and Ashley Foehner. Golden, Colorado: Fulcrum, 2008.
- . *Water Dance*. Back matter text by Candace Christiansen. New York: Harcourt, Inc., 1997, 2002.
- . *Where the River Begins*. New York: Puffin Books, 1993. Originally published by Dial Books in 1984.
- . *The Young Artist*. New York: Puffin Pied Piper Books, 1989. Originally published in hardcover by Dial Books.
- Beasley, Leona. "The Life Cycle of Painter and Children's Book Author Thomas Locker: Art that Moves through Time." August 21, 2010. <http://patch.com/new-york/tarrytown/the-life-cycle-of-painter-and>. 2015 年 4 月 3 日閲覧。
- Dodge, Mary Mapes. *Hans Brinker; or the Silver Skates*. Edited by Kathryn Lindskoog, illustrated by Patrick Wynne. New Jersey: P & R Publishing, 1993, 2001.
- Jobe, Donald. "Book Review of *Home: A Journey through America*." *School Library Journal*, October 1998, 125.
- Lothrop-Green, Patricia. "Book Review of *Water Dance*." *School Library Journal*, April 1997, 128.
- Millhouse, Barbara Babcock. *American Wilderness: The Story of the Hudson School of Painting*. New York: Black Dome Press Corp., 2007. Originally published by Doubleday in 1978.
- Novak, Barbara. *Nature and Culture: American Landscape and Paintings, 1825-1875*. London: Thames and Hudson Ltd., 1980.
- Peters, John. "Book Review of *Sky Tree*." *School Library Journal*, October, 1995, 128.
- Publishers Weekly*. <http://www.publishersweekly.com/978-0-399-21857-6>. 2015 年 6 月 3 日閲覧。

- Seelye, John. "Time Travel by Water." *New York Times Book Review*, November 11, 1984, 49.
- Something About the Author: Facts and Pictures about Authors and Illustrators of Books for Young People*. Volume 59. Edited by Anne Commire. New York: Gale Research Inc., 1990. 109.
- . Volume 109. Edited by Alan Hedblad. New York: Gale Group, 2000. 133-136.
- Thurlow, Kendra. "Hudson River in the Pioneer Valley." August 20, 2008.
<http://www.valleyadvocate.com/2008/08/28/hudson-river-in-the-pioneer>. 2015年4月3日閲覧。